

教員の声

留学生に必要な日本語力とは？

留学生センター 桑原 陽子

留学生センターは、留学生対象の外国語科目（日本語）として年間計8科目（中級4科目、上級4科目）を共通教育に提供しています。今回のフォーラム誌への執筆は、留学生に対する日本語教育の現状と課題を多少なりとも知っていただくいい機会だと思います。

そもそも留学生に必要とされる日本語力とはどういうものなのでしょう。講義を受ける、専門書を読む、討論に参加する、レポートをまとめるなど学習に関わる日本語力は当然必須です。専門教育レベルになると、読むことが中心となる理解に関わる日本語力の養成は容易ではありません。レポート、口頭発表など言語の産出が要求されるとさらに困難で、十分に時間をかけたきめ細かな学習支援が不可欠です。後者は、日本人学生ですら危ういのだから、留学生はなおさらではないでしょうか。

これらに加え、見過ごされがちなのが、留学生生活を円滑に送るための日本語力の養成です。いわゆる「コミュニケーションのための日本語」で、その重要性が認識されつつも、専門に関わる日本語力の養成に隠れて、後回しになりがちです。留学生に関わっている教員なら、誰しも経験することだとは思いますが、私が遭遇したほんの一例を挙げてみたいと思います。

事例1：「先生の授業、俺、すげえおもしろい。」留学生（男性）に実際に言われたことです。親しみをこめた好意的な発言だったのだと十分わかっているのですが、素直には喜べませんでした。

事例2：「ちょっと、微妙っすねえ。」新聞読解の際、筆者の考えに対して賛成できるかという私の問に対する回答です。授業態度は良好でこの回答も真剣なのですが、やはりまずいでしょう。周りの日本人学生が日常使っているのを自然に習得したのだらうと思われる。

その他、どうしても「はい」と言えずに、何度注意しても「うん」としか答えられない者、メールの書き方が不適切な者など、このコミュニケーションのやり方ではまずいと思うことに日々遭遇しています。もちろん、日本人学生にも同様の問題があり、第2、第3言語として日本語を使用する留学生に対してそこまで要求することはないという声もあるでしょう。しかし、問題なのは、彼らが第1言語（母語）では、状

況に応じた適切な配慮のある言語使用ができており、日本でもそうありたいと願っているのにもかかわらず、自分の日本語の不適切さを理解していない場合です。その見極めと助言のタイミングは非常に難しく、日本語学習を支援する側は、辛抱強く彼らとのコミュニケーションを続けていくほかありません。

日本で生活しながら日本人と一緒に大学で学ぶ以上、専門教育を受けるための日本語力とコミュニケーション力の養成は、どちらも重要且つ急務のはずです。失礼ながら、「この日本語力でどうやって専門の講義を受けているのだろう。英語が堪能とも思えないし、教員とのコミュニケーションはどうなっているのだろう。」と思わざるをえない学生に出会うと、日本語教育に携わる者としては、何とかしなければという思いを強くします。個人的には、共通教育の日本語クラスだけでは到底足りないと思っています。

留学生センターでは共通教育とは別に、本学留学生なら誰でも受講できる全学日本語コース（単位認定なし）を週18コマ開講しています。大学院生が中心のコースですが、必要に応じて学部留学生にも受講を勧めており、自発的に受講を希望する学部留学生もいます。しかし、「専門の授業と重なっている」という理由で十分な受講ができないことが多く、非常に残念です。

ならば学部留学生には、共通教育の日本語クラスでしっかりと学んでもらいたい。1年次にもっと集中して日本語の授業を受講してもらうことはできないだろうか。しかし、1年次に必要単位をとってしまったら、2年次からは日本語のクラスを全く受ける必要がなくなるがそれでいいのか。作文指導が必要だ。シラバスの見直しも必要ではないか——留学生センターでは、共通教育の日本語クラスの中で留学生の日本語力向上にどう取り組んでいくべきか、機会を見つけて話し合っています。

受け入れた留学生に対しては、責任を持って適切な日本語学習支援を行いたいと思います。そのために、何が必要とされているのかも、できるだけ具体的に知る必要があります。今、ぜひ知りたいと思うのは、専門教育を行っている先生方の率直なご意見です。小さなことでもかまいません。「こんな点が困っている」とお知らせいただければ幸いです。そして、留学生の皆さん、もっと自分の日本語力を高めたいと思ったら、ぜひ留学生センターの教員に相談してほしいと思います。それが大切な第一歩です。